

獅子の昼寝

獅子が気持ちよく昼寝をしていました。どこからか小さなネズミが獅子の背中に駆け上がりました。獅子は驚いて背中にのぼったもの確かめるために、ぐるぐるとまわり始めました。

それをそばで見ていた狐が大笑いをして「獅子さん ネズミですよ 獅子さんともあろう方がネズミがそんなに怖いのですか」すると獅子は悠然として答えました。「狐さん ネズミは怖くないんだ 獅子が眠っているのにその獅子の背中にのぼった奴がおる そのこと自体に驚いているんだよ」



岡に立つ狼

狼が小高い岡の稜線を歩いていて。太陽はすでに西に沈みかけていて狼の長い影が岡に延びている。

狼は自分の大きい影をほればれと眺めて「立派なものだ、この俺は 身の丈は百尺 この立派さがあれば あの獅子でさえも恐ろしがって逃げ出すことは間違いない そうすりゃ 俺様が 獣の王様だ」

これを聞きつけた獅子はすっ 飛んでいって狼の首に食いついた。狼が死に際に叫んだ「われわれの不幸の原因の一つに身のほど知らぬ思い上がりというのがあったのだ」



馬の憂鬱

あるお屋敷に痩せこけた馬が飼われていました。この馬を世話する馬番は餌にする大麦を盗み出しこれを売って自分の小遣いにしていました。

しかし、彼は毎日馬を美しく磨きたてていました。ある日 馬は思い切って馬番に言いました。

「私が美しくなることを本当にお望みなら私の大切な大麦を盗まないでください」

